

TALK
SHOW
トークショー

トマ・ピケティ
『21世紀の資本』

刊行
記念

山形浩生 × 飯田泰之

Hiroo Yamagata

Yasuyuki Iida

訳者解説プラス

話題の『21世紀の資本』の読みどころとは。本書の翻訳者である山形氏と、日本の貧困問題に警鐘を鳴らしてきた経済学者、飯田氏による対談でわかりやすく解説する。

1 なぜアメリカで受け入れられたか

飯田 ピケティの著書『21世紀の資本』が世界的に注目されていて、米国では50万部以上売れたそうです。どちらかというと格差論に対して冷淡だった米国で、かくまでの大流行をみせた背景には何があるのでしょうか。

山形 僕にもよくわかりません。でも、米国では、冷淡ではありながら、格差についての議論は少しずつ進んでいたと思います。ウォール街占拠の運動では、ピケティの昔の論文を論拠に、「われわれは99%で、1%の連中はもうけ過ぎだ」（“We are the 99%”）というスローガンを掲げていた。

また、それに対し、富裕層も反論していた。1つは、格差なんてないのだから、おまえら誤解を招くようなことを言うなという意見。それからもう1つは、格差は広がっているけれども、それはグローバル化やIT化による環境変化によって皆が能力相当のものを得ているだけでやむを得ない、ひがまず頑張る能力を高めなさいという意見。このように議論が盛り

上がっていた中でこの本が出てきて、議論のベースとなるデータを提供したことが、流行った理由として大きいのではないかと思います。

米国における格差論への注目度の高さの1つの印として、この本が出た直後に『フィナンシャル・タイムズ』（FT）が突然、これに対する反論として、独自の統計分析を出して、ピケティの言っていることは間違っている、格差は拡大していないというChris Gilesによる記事を發表した。また、その直後に、ピケティの言うことは割り引いて聞けという記事を載せるなど、かなり強い反応を示した。それに対しピケティももちろん反論して、違う統計を持ってきても、それは有効な批判ではないと主張しました。

本書が米国で売れたのは、ウォール街占拠などに参加した人たちだけではなく、FT側、つま

*この記事は、2015年1月10日（土）に、紀伊國屋書店新宿本店にて行われた第255回新宿セミナーでの講演、トマ・ピケティ『21世紀の資本』（山形浩生・守岡桜・森本正史／翻訳、みすず書房、2014年）刊行記念 山形浩生×飯田泰之トークショー「訳者解説プラス」をまとめたものです。全文は、シノドスのメールマガジンでも配信されます。

り資本家の側と言うべき人たちも、やはり気にはしていたことが背景としてあると思います。

飯田 FTの矢継ぎ早の反論を見ると、本当に格差は拡大しているのだらうかと、逆に勘ぐってしまいますね。

山形 そうですね。

飯田 この本は、日本でも非常に注目されています。日本語版の刊行は2014年12月9日でしたか。ピケティの本が英語圏で話題になったとき、日本語版ができるまでに3年はかかるなと思った。それがこのスピードで出たのはすごく重要なことだと思うのです。学者が訳したら20年ぐらいかかってしまったかもしれない(笑)。

山形 僕は3カ月で訳しました(笑)。

飯田 ちなみに、日本語版は現在、何刷ですか。

山形 7刷か8刷で、13万部だそうです。

飯田 そうすると、今世紀でいちばん売れた経済専門書になるのではないのでしょうか。

山形 1冊6000円近くしますから、金額的にも部数的にもそうですね。

飯田 こんなに流行ったアカデミック系の本は久々ですね。サンデル以来でしょうか。ただ、サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』(早川書房、2010年)はいわゆる一般書じゃないですか。一方、ピケティの本は、学術論文とまではいかないけれども、どちらかという素人が読む本ではないというイメージです。その意味でも、この本がこれだけ注目されているのは本当に意外です。

山形 そうですね、僕のところに翻訳しろという話が来たのも、この本がそんなに売れるとは思われていなかったという証拠です(笑)。700ページもあって翻訳に手間はかかるし、内容は専門的。専門的ということはいろいろな学者さんから突っ込まれてうるさいし、しかも売れない。普通だったら7000部か8000部売れたら御の字という世界で、それではろくに収入にならない。そんなのをやりたがるのは専門に研究している学者さん——これは飯田さんが先ほど言っ

たように出来上がるまで20年かかる——か、本業があって翻訳は趣味の僕ぐらいだろうと。トロツキーや毛沢東の分厚い伝記とか、売れなさそうで面倒くさそうな仕事は僕のところに結構回ってきます。ああいうのが回ってくるのは、あいつは面白ければ何でもやると思われているからでしょうね。売れる本を山形が独占しやがってけしからん、と思われているかもしれないけれども、こんなに売れるなんて僕も驚いたくらいなので、そこら辺は誤解なきように(笑)。

飯田 僕は山形さんの訳だから絶対売れると思ったんですが、売れるといっても3万部くらいかな、と予想していました。もうそんなのとっくに突破してしまっていますからね。日本でもこのように広く受け入れられている理由は何でしょうか。

山形 これも、わからないよというのが正直な

PROFILE

山形浩生さん(やまがた・ひろお)

1964年東京生まれ。東京大学工学系研究科都市工学科修士課程修了。マサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。大手調査会社に勤務のかたわら、科学、文化、経済からコンピュータまで、幅広い分野にわたる翻訳・執筆活動を行っている。
 著書：『訳者解説 新教養主義宣言リターンズ』(バジリコ、2009年)、『新教養としてのパソコン入門』(アスキー新書、2007年)。翻訳書：『それでも金融はすばらしい』(ロバート・シラー／著、東洋経済新報社、2014年、共訳)、『トロツキー(上)(下)』(ロバート・サーヴィス／著、白水社、2013年、共訳)ほか。

飯田泰之さん(いいた・やすゆき)

1975年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。駒澤大学経済学部専任講師・准教授を経て、2013年より、明治大学政治経済学部准教授。財務省財務総合政策研究所上席客員研究員。株式会社シノドス マネージング・ディレクター。専門は経済政策、マクロ経済学。
 著書：『脱貧困の経済学』(共著、自由国民社、2009年)、『志向の「型」を身につけよう——人生の最適解を導くヒント』(朝日新書、2012年)、『日本がわかる経済学——NHKラジオビジネス塾』(NHK出版、2014年)ほか。

写真入る

答えです。例えば何年かに一度ぐらいわけのわからないものが流行る。テレビドラマ・映画の「ツイン・ピークス」が流行ったり、井上ひさしさんの小説『吉里吉里人』がやたらに売れたり、たまたま変なものを皆が欲しているときに、うまくはまっただけという可能性はないわけではない。

ただ、その一方で、多くの人が格差をうすうす感じていて、それが本当はどういうことなのかを理解したいという背景はあったのだと思います。

飯田さんは雨宮処凛さんと貧困に関する本を出したり、日本の格差問題を分析したり、こういう問題にかなりたずさわってこられています。貧困や格差への関心は、日本にすでにあっただけではないかと思うのですが、どのように見ていらっしゃるのでしょうか。

飯田 伝統的には総中流意識、近くは変形したトリクルダウン論によって格差問題は一部の「変わった人」だけの関心事となりつつあったのではないのでしょうか。「欧米の最先端の経済学では、そんなことに興味を持っている人はいない。日本の格差は欧米に比べたら微々たるものだから注目に値しない」というような。まさに先ほどの米国の資本家サイドと同じで、これは実力の差ですよ、グローバリゼーションですよ、デジタルデバイドですよという議論のほうが優勢だったと思います。

僕は、雨宮処凛さんとの共著で『脱貧困の経済学』（自由国民社、2009年）を書いたのですが、いまだにツイッターや2ちゃんねるでは、飯田は社会主義者だという話が出ます。当時は小泉改革全盛期で、再分配に非常に冷淡な政策提言の方が「ウケ」た。そんな中、金持ちに課税せよ、相続税を増税して給付金を出せと言ったら社会主義者というイメージをもたれてしまった。今は、それがだいぶ変わってきていると思います。

山形 これまで格差の本はたくさんあったけれ

ども、格差がある、自民党政権けしからんとか、ブッシュけしからんと言うだけで、政権交代すれば解決するという結末になりがちでした。しかし、ピケティの本は、そういう直情的でお手軽な議論でもないし、純粹に理屈だけでもなく、うまく中間に収まった。ピケティもこの本は経済学と歴史学の間にあるような、ちょうどぼっかりとあいていた穴を埋めたのだよという話をしている。手取り早く答えを出してくれる本ではないのですが、それが逆に信頼感を高めている面もあると思います。

2 「 $r > g$ 」のインパクト

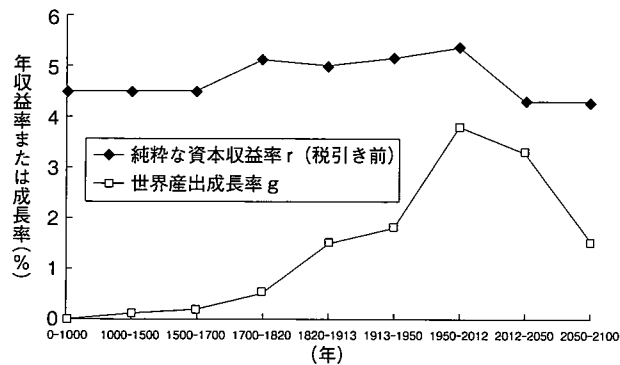
飯田 これはもう何回も聞かれているかと思いますが、タイトルは「21世紀の資本論」にしなかったのですね。

山形 はい。英語版が勢いよく売れ始めたときに、ネット上のあちこちで、「21世紀の新しいマルクス」「21世紀の資本論」という言われ方をしている、「資本論」の更新版だという認識がかなりあったと思います。それこそ、マルクスの再来と言われたりもしました。実際この本の中でもマルクスを参照していて、データはないなりに頑張ったと褒めてはいる。ピケティは、インタビューでは「俺、マルクス読んでない」とか言っていますが、あれは絶対うそですから（笑）。この本では、『資本論』の脚注にまで入り込んで詳細な議論をしているから、絶対読んでいる。けれども一方で、マルクス主義と関連づけられるのを明らかにいやがっている。

それにはいろいろな理由があります。まず、特に米国では、「おまえはマルクス主義者だ」と言われた瞬間に議論が止まってしまう。本人としても『資本論』とは別系統で資本の話がしたいと考えていたと思うので、そのあたりに配慮して、『資本論』の更新と思われぬようなタイトルにしたほうが良いと考えました。

飯田 今でも、いわゆるマル経っぽい本ではな

図1 世界的な資本収益率と経済成長率の比較（古代から2100年）



注) 税引き前の資本収益率は世界経済成長率よりも常に高いが、その差は20世紀に減少し、21世紀には再び拡大している。

出所) <http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>

いかと言われることが多いのですが、ピケティ自身はザ・主流派経済学の教育課程を修了しているのですよね。

山形 そうです。しかも超エリートです。22歳で博士号を取ってすぐMITの先生になるという、すごい経歴です。

飯田 その中から出てきた資本主義批判ですよ。ただ、読んでみると、あからさまに批判をしているというよりは、資本主義下での所得の分配とはこういうものです、と淡々と述べている本だと思うのです。

この本の、いちばんの核心、または最初に注目すべきところはどこですか。

山形 この本が売れている理由の1つでもあります。1行でまとめられる要約があることです。「 $r > g$ 」。これにより、経済全体の成長率よりも資本収益率のほうが圧倒的に大きくなってしまふことを表しています。

r を再投資することによって、資本を持っている側は資本所有をどんどん大きくしていける。当然、そこからの上がりも大きくなる。一方、それ以外の人は g ぐらいの生活水準向上しか期待できない。そういう状況がどうもデータを見るとあるようだ。経済学の理論上は、こういうことは起こらないと言われているけれども、実際にデータを見てみたら、 r が g より大きくな

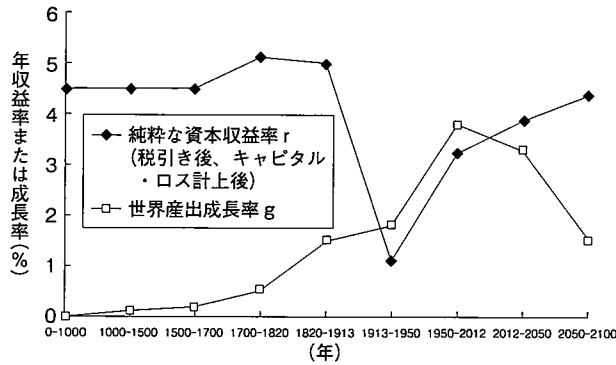
っている、と。これはすごいデータの強さです。しかも300年にわたる長期のデータを使い、それを打ち出してきた。正確には300年どころではないですよ。

飯田 古代からのデータを追っていますからね。

山形 そうそう。紀元0年～2000年の足跡を追っている(図1、2)。それだけの期間を見ていて、こういう法則が成り立っていることを曲がりなりにも実証的に示し、議論のベースをつくったことが、まずこの本の重要な意義だと思います。

飯田 そもそも、 $r = g$ 、つまり資本の収益率と経済全体の成長率が一致するというのはそれほど確立された経済理論ではない、と僕は思っています。1950年代にカルドアという経済学者が示した、経済成長に関する定型化事実(スタイライズド・ファクト)なのです。どうも統計を見ていると経済全体の所得のうち、資本家の取り分と労働者の取り分の割合はあまり動かない。ということは r と g は同じぐらいの速度で成長していると解釈できる。その定型化事実から出発して、その後の経済理論は、カルドアがそう言っているのだからそうなのだろうと、 r と g が等しいという前提でモデルを組んでいる。そして50年経つと、なぜイコールにしていたのかを皆忘れてしまい、理論的に重要な根拠があ

図2 世界的な税引き後資本収益率と経済成長（古代から2100年）



注) 20世紀中、資本収益率(税引き後、キャピタル・ロス計上後)は成長率を下回ったが、21世紀には再び上回った。
出所) <http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>

ると思ひ込んでしまったのだという部分があると思います。

僕自身も実はこの本を最初に読んだときに、でも成長論からするとおかしいよなと思ひ、少し考えて、あ、違う違う、と。成長論のほうが1950年代の統計を、むしろ前提にしていただけなのだ、と。特に主流派の経済理論で結構あるのですが、そのモデルを開発した当時成り立っていた統計的な前提を30年使っていると、なぜその前提を置いているのかを忘れてしまったりする。その意味で、学説史は結構重要だと最近特に思ひます。

3 なぜ「 $r > g$ 」か

飯田 そもそも、『21世紀の資本』で考えている資本とは何に当たるのでしょうか。資本といっても、物的資本・金融資本・人的資本、さらには文化資本とさまざまです。さらにグロスの資産そのものの総額なのか、ネットの純資産なのかでも話は違ひてきます。

山形 お金で取引できる会計上のバランスシートに載ってくるものだけが資本なので、まず人的資本は入っていません。バランスシートの左側の資産全部ではなく、そこから負債の部分は引ひているので、ネットの資産、つまりエクイ

ティ部分です。

飯田 ネットの資産の収益率ということになると、レバレッジがかかるので、 r のほうが高いのは当たり前なのは、と思ひてしまいます。

なぜ r が g より大きくなるのか。いろいろな理屈があると思ひますが、どうでしょう。

山形 僕はもともと本業は不動産畑出身で、その後、不動産金融に近い仕事に携わっていたので、身近にいるファイナンス畑の人に話を聞くと、「それは当たり前じゃないの。だってリスクプレミアムがあるでしょう」と言われます。歴史的データを分析した本なので、後から見れば r のほうが g より大きいとわかるけれども、今の時点で、「きみたち、 r が g より大きいのがわかったでしょう。だったら、いますぐ株や不動産に投資したらいいじゃん」と言われても、それはリスクーだし、どれが当たるかわからないし、ちょっとやらないよねという話になると思ひます。

そこで思ひきって投資する人たちは、ある程度リスクを負うわけです。この本でいう資本には例えば工場や生産設備なども含まれているから、株や不動産だけではなく、売れるかわからないiPhoneをつくるために何十億を投じることも、リスクーな投資の1つです。リスクを負っているのだから、その分が上乗せされている

少しおぼろげな

r, g
1
9

のは当然ではないかと、ファイナンス畑の人たちは思う。だから、 r が g より大きいことはそんなにすごいことでしたっけと言っている人たちもかなりいます。

ちなみに、資本の収益率を計算するためには、資本の価値を計算しなければいけないわけだけでも、そのときの計算方法は非常に限られています。よく使われるのは収益還元法で、それは、 r が g より大きいことを前提に組まれている式なので、循環論法になっている可能性もなきにしもあらずかな、と僕は思います。ただ、それはピケティの理屈のつけ方をもっと細かく見ていかなければいけないので、学者の皆さんに十分考えていただければと思います。

飯田 リスクを負って投資をする場合と、リスクを負わないで一般的な働き方をする場合とで収益率が同じだったら、誰も危険なことをしない、つまり投資をしないことになりかねないわけですよ。

その一方で、収益率が高いのだったら皆投資すればいいではないかと思うかもしれませんが、話はそれほど単純ではありません。オイルショック以降、日本株をずっと保有していると、全部均すと年率6%くらいの利回りがあったことになります。6%なんて経済成長は、日本ではオイルショック以降経験したことはありません。バブル絶頂期でもその半分くらいです。株が有利ですよという程度の話ではなく、金持ちほどより高い r を得られるという点にピケティはすごく注目している。これが結構面白いと思います。

山形 そうですね。ここも議論のあるところで、投資やファイナンスの本を読むと、超過利潤や超過リターンなんてないから、一時的にはよくても長期的には平均ぐらいにしかになっていないと書かれていて、本当に金持ちほど、あるいは大きい規模での投資ほど r が高いのかは、議論の分かれるところではあると思います。

ただ、彼は実際に米国の大学の基金の運用実

績を調べ、規模が大きいところは年平均で8%ぐらいの収益を上げているけれども、小さいところは6%しか上げられないし、ハーバード大学やイエール大学など大きいところは10%稼いでいるという数字を出している。その上で、「ほら、やっぱりそうでしょ」と言われると、理屈はどうあれ、黙らざるを得ません。

飯田 金持ちのほうが金融投資において有利ですよという話を聞くと、一般的な経済学者は、1、2回失敗しても破綻しないので、リスクを取った、より危ないポートフォリオができる。だから、危ないところに10カ所投資すると、そのうち1カ所ぐらいは大当たりして、それが収益を引っ張ってくれると考えます。僕も絶対次にこの話が来るのだろうと予想しながら読んでいたら、「そうではない」とひっくり返された。むしろ、よい金融サービスを受けられるという点に注目しているのがちょっと意外でした。

山形 よい金融サービスの中には、たぶんリスクキーなところに投資できるということも入ってくると思いますが、リスクがどうこうという話はあまり出てこない。確かにこれはちょっと意外なことではあります。あくまでこれは歴史的データを見た結果で、リスクはこれから起こることに対するものなので、過去のデータを見ただけだと、リスクについて言及することは難しいということですかね。

4 クズネツ曲線は成立しない

飯田 r (資本の成長) のほうが g (一般の労働者の所得の成長) よりも速いという状況を考えてときに、かつて資本家と労働者がいた時代であれば、「だから資本家と労働者の格差は拡大する」となるのですが、現在だと、資本家と労働者はそこまで厳密に分かれていないのではないのでしょうか。例えば、若いうちは皆財産がない。働いて稼いだ額の何割かを貯金する。そし

て、年齢とともに資本所得のほうが大きくなっていくので、一生を見れば r と g の大小は大した問題ではないという反論があり得ると思います。このような世代差の問題について、ピケティはどのように述べているのでしょうか。

山形 そういうことはあり得るだろうと言っています。その一方で、特に彼が問題にしているのは相続です。相続により、次の世代が親のため込んだ資本を受け継ぎ、そこからさらに資本が増えるようになってしまうと、今の話はあまり成り立たない。

飯田 確かにそうですね。

山形 彼はロレアル化粧品のリリアンヌ・ベタンクールをやたらに目の敵にして、「こいつ、一度も働いたことないくせにこんなに稼いでいるんだよ」と批判します。相続を通じて資産が受け継がれて、その資産がまたお金を生んでどんどん積み重なるようなことが今後は起こらないのなら、それは結構だけれども、ベタンクールの例のように、現実にもそうなりつつあるじゃないかというのが彼の問題意識になっている。

飯田 これまで、経済史においては、クズネッツの逆U字曲線という考え方が格差論の定番でした。資本主義が始まると最初は格差が拡大するけれども、次第に、例えば労働力が不足して賃金が上がるといった形で格差は縮小していくのだ。だから、格差を縦軸に、横軸に時間の経過をとるとグラフはU字の逆で、上がって下がるのだ。僕自身も経済史の授業で聞かされてきましたが、これがどうも成り立っていないという話ですよ。

山形 そうですね。1月9日のNHK「パリ白熱教室」第1回目をご覧になった方はご存じだと思いますが、ピケティは真っ先に、クズネッツに言及し、自分はもう少し長い期間のデータをとっただけだよと強調していました。

その長い期間のデータを見たらどうも違う。クズネッツがそういう結果を出したのは、たまたま歴史的に非常に特殊な時期に限られたデー

タを見ていただけで、実際は自然に逆U字曲線が起こるわけではないというのが結論です。そのデータはおかしいですよと、データを示しつつ反論できればいいけれども、まだ原著が出て1年ちょっとしか経ってないので、誰も反論の準備はできていない。

飯田 標準的な経済学の議論の仕方だと、仮説を立てて、理論モデルをつくり、それをデータによって検証するという感じで行われるのですが、ピケティの本を読むと、理屈はいろいろあるかもしれないけれども、データはこうですと、理論の部分はどうでもいいと思っているようなふしがあるんですよ。

山形 彼は、理屈ってかなりいいかげんな前提に基づいてつくっているでしょうと、数理モデル的な経済学のあり方を批判しています。

余談ですが、僕の本業は、ODAによる開発援助の仕事で、その基本的な理論的な支柱は、まさにクズネッツの、経済発展すれば最初は格差は開くかもしれないけれども、そのうちそれは必ず縮まる、という話です。開発援助は、まずは経済成長を促進しましょう、そうすればそれ以外の問題は自然に解決するから、と言う。

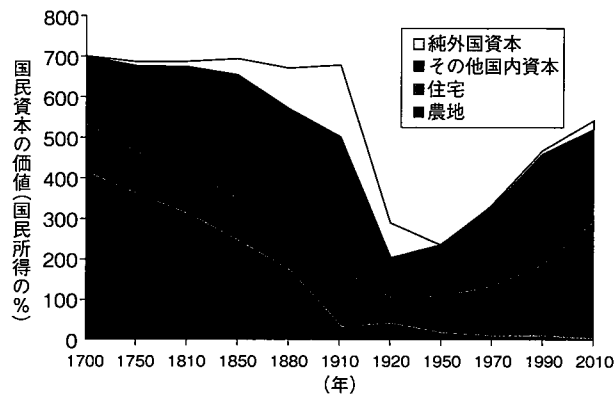
ところが、格差は自然には解決しないことが示された。すると、自然に解決しないような形で開発援助もしなければいけないのかという話になる。それはかなり内政干渉っぽくなるし、どうやればいいのかというので、今後この業界で非常に面倒な話が持ち上がるのではないかとすごく心配しているのです。

5 米国型の格差とヨーロッパ型の格差

飯田 資本所得と労働所得の格差を考えると同時に、もう1つ重要視されているのが、資本/所得比率です。資本係数という方がなじみがあるかもしれませんが、つまり、国民所得・GDPの何倍の資本——本書では、資本は財産や資産、

△
かえ
ました

図3 イギリスの資本（1700-2010年）



注) 1700年のイギリスでは国民資本は国民所得7年分くらい(うち農地が4年分)。

出所) <http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>

富がすべて同じように使われているようですが、—があるのか、そしてその推移にも注目しているのですが、僕は実はここは最初に読んだときにどうもピンと来なかったところ。

山形 国同士を比べる場合には経済規模を考えないといけないから当然だろうという気もしたのですが、何か違和感があるのですか。

飯田 もちろん、資本の大きさを国際比較するためにGDPで割るというのはわかります。ところが、GDPの何倍資産があるのか、その値が近年では高まっていて、ベル・エポック、第一次世界大戦前の水準にまで上昇しているという話を結構しつこく書いていますよね。しかし、日本で資産総額とGDPの比率がいちばん高くなったのはバブル絶頂期です。そうすると非常にたくさんの資本を持っているわりにGDPは小さい、つまり資本/所得比率が高まったことは、単に経済の効率が悪いということではないかと思うのです。

山形 なるほど。つまり、同じ資本で生産しているものが少ない、と。それはあるかもしれません。この本には、世界全体で r はだいたい4~5%みたいだよという話が出てくるのですが、国別にはひょっとしたら違うのかもしれない。これはデータを見ていないからわかりませんが、

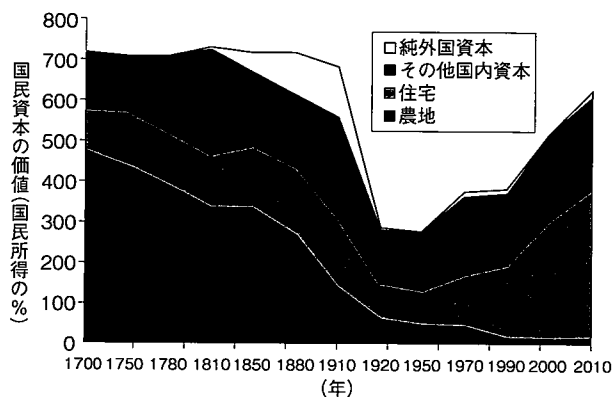
図1で、資本の収益率はずっと4~5%で一定になっているけれども、千年単位や一世紀単位で見ている部分をもう少し細かく10年、20年の単位で刻んでみると違う結果が出るのかもしれないと思います。

飯田 何と言っても、この本の核心に当たる $r > g$ について、このタイプの格差を説明し、解説するときに注意しなければいけないのは、ピケティがいちばん興味を持っているのはヨーロッパの所得格差だという点です。例えば、冒頭の部分で少しだけ米国の格差に触れて、米国型の格差とヨーロッパ型の格差には違いもあるという指摘もしている。両者の違いはどこにあるのでしょうか。

山形 この本では、ヨーロッパ型というのは、経済の中で資本の占める比率はどんどん上がってきています、だから資本の格差がそれに伴って増えているのだと説明されています。

ところが米国の場合は、実は資本の話はあまり出てきません。図3~5には、イギリス、フランス、米国の資本構成の変化が示されています。イギリス、フランスでは資本/所得比率はガクッといったん落ちて、また上がっていますが、米国はほぼ横ばいになっている。だから r が g より大きくなり、資本の部分がどんどん増

図4 フランスの資本（1700-2010年）

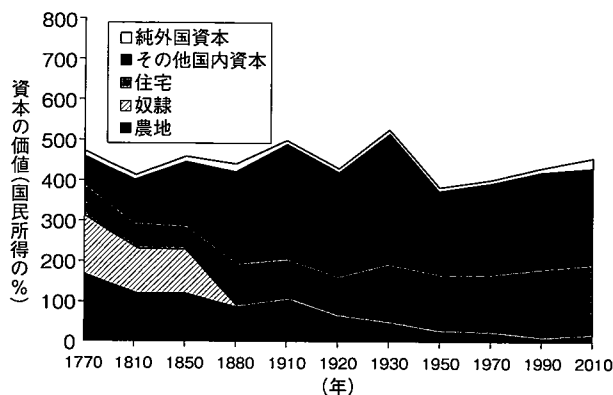


注) 1700年のフランスでは国民資本は国民所得7年分程度（うち外国投資が1年分）。

出所) <http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>

近く

図5 米国の資本と奴隷



注) 奴隷の市場価値は1770年ころには米国民所得の1.5年ほど（土地とほとんど同じ）。

出所) <http://piketty.pse.ens.fr/capital21c>

えているというのは、どうも米国にはあまり当てはまっていない。

ピケティはそこで、しかし米国は所得格差がすごい。会社の重役がものすごい高給取りになっていて、それによって所得の格差がすさまじいことになっている。これはフランスやドイツよりもはるかにひどい、やはり米国でも格差が問題だと指摘するのですが、 $r > g$ の話とは少しずれてしまいます。米国は例外かもしれないけれども、それにしてもかなり大きな例外です。ただ、彼は、今後は重役報酬によって資本をた

め込んだ人たちがそれを相続していけば、イギリスやフランスと似たようになるのではないかという話はします。

飯田 米国の所得格差の特徴がヨーロッパと違う理由として、2つ考えられることがあります。1つは、この本自体が超長期のデータを相手にしているのに対し、米国がまだ新しい国だからということ。

それともう1つ、多少関係するかもしれないのは、ヨーロッパは二度の世界大戦で戦場になったから、一時的に戦争で落ちているだけで、

元に戻っていて、米国は1回落ちて戻るとい
う波がなかっただけなのではないか、というこ
とです。

ピケティは、戦後の大幅な格差縮小は、戦争
そのものによる資産の破壊と戦争に伴うシス
テムの変換によるインパクトが大きいの、資本
主義本来の力で勝手に逆U字のようになったわ
けではないということ、ずいぶん強調してい
ると思います。

山形 そうですね。彼が言っているのは、特に
ヨーロッパは——米国でも多少はそうだと
言うのですが——基本的にはまず経済がかなり
高く成長した。先ほど、成長したから格差が
なくなるわけではないと言いましたが、成長が
低くて格差がなくなることはほほないので、
どちらかというとむしろ高いほうがよかつた。
それからインフレがあった。

もう1つは、高率の所得の累進課税をかけた。
戦前は累進所得税というのは考えられなかつた
けれども、戦争だ、お国のためにやりなさいと
言われ、皆が受け入れるようになった。それ
により、人為的な形で所得格差も縮められたし、
資本も、破壊されたり、一部接収されたり、国
営化されたりして減少した。そういう形で人工
的にいろいろ施策をやったから格差は縮まった
という話ですね。

飯田 確かに、クズネッツの逆U字曲線に関し
ても、そうやって偶然に偶然が重なった、また
は戦争によって人為的に行われた格差縮小を資
本主義の一般原則のように捉えているに過ぎな
い、むしろ超長期で見ると、幸せなクズネッツ
カーブは特殊な事例だと強調して批判してい
ます。

山形 非常に極端な考え方をすると、そういう
人為的なことが起こるのも自然の経済システ
ムの一部であり、ナチュラルに皆、累進課税を
しようと思いはじめめるのだ。そこも含めて
自然に起きたのだという主張が制度論者から
出てくる可能性はある。今の時期にこうい
う本が出てきて、

累進資本課税のようなことを皆が考え始め
たのも、そういう自然な経済の仕組みだと言
えなくもないが、ちょっと苦しいですね。

飯田 そこまで行くとハリ・セルダンの心理
歴史学のような話になってしまいますね。

6 反経済成長なのか？

飯田 ピケティの本がここまで注目されて
いる1つの理由は、やはりマルクスを連想さ
せ、反経済成長または反グローバリズムの本
だということ受け止められ方をしているから
ではないか。実際に読んだらそういった解釈は
できないと思うのですが。反成長ではない格
差論という点で目新しいような気がします。

山形 どうでしょう。ただ、この本を読んで
、反成長のほうに進む道筋は確かにないわけ
ではない。第2章で、経済成長率は戦後は高
かったけれども、それは米国に追いつき追い
越せをやっていたから皆高かっただけです。そ
れが終わりました。人口も減っています。そ
うすると今後、経済成長は、たぶんあり得
ないでしょう、というニュアンスをとても強
く出しています。

そうすると、 r と g の関係からいって g が
大きいほうがいいのかもしいけれども、ピケ
ティは経済成長はあり得ないというニュア
ンスで書いていますよ。よって今後、経済成
長は起きません。よって経済成長が起きると
言っている連中はインチキですという理屈は
立てられる。その意味ではピケティを使っ
て反成長論を展開するのもわからなくはない。
別にピケティは成長してはいけないとはど
こにも書いてないの間違っているとは思
うけれども。

飯田 一方で、経済成長率が高いほうが
よいというニュアンスで書いてるところもあ
ります。さすがにこれだけ分量が多いと、一
部だけをつまみ食いして、何でも言えて
しまいます。

山形 ちなみにピケティは、インタビュー
ではグローバリズムはそれなりによかつた
のではな

いかという話をしている。ただ、これも成長とつながっての話だと思います。

本書でピケティが示す解答はグローバルな累進資本課税というもので、とにかくそれがいち押しという感じで出てくる。ただ、この本を読んでいると、ほかにもちゃんと格差解消に効くものはあると書かれている。実は、経済成長が効き、次にインフレが効いて、それから人的資本への投資、あるいは情報の普及のようなものも当然あり、さらには累進の所得税や相続税もある程度効いてきたと言っているのです。けれども、自分の解答を示す段階になると、グローバル累進資本課税をお勧めするために、これに比べたらインフレはこんな欠点もあるし、相続税も全然捕捉できてないから全然役に立たないよね、と言う。

だからインフレが嫌いな人は「インフレはだめだ」と言っているじゃないと言うし、われわれのようにインフレが好きなのは、「インフレはいい」と言っているじゃないと言う。両方ともピケティがこう言っていますという話になり、両方とも間違っていないけれども——僕は、正しいのはインフレはよいと言っているほうだと思うのですが——そこら辺は見方の違いになってしまう。この点は注意したほうがいいと思います。

飯田 インフレはある程度効くけれども、グローバル累進資本課税に比べたら全然大したことはないという部分を引用して、ピケティも不景気のときにはインフレはだめだと言っていると主張するのであれば、その人はグローバル累進資本課税に賛成していなければいけないのに、顔を思い浮かべると、絶対それに賛成しなさそうな人がその部分を使ってインフレ批判をしている。だから、ちょっといやな感じとってしまう。

山形 それはあります。ただ、多くの人がきちんと通読せずにつまみ食い、ああ言っています、こう言っていますと自分の主張の裏付けと

して融通無碍に使えることが、それはいやな形だけれども、この本の人気の理由の1つでもあるのかなとは思っています。

7 日本の格差

飯田 この本では日本についてはほとんど触れられていませんね。

山形 80年代バブルはすごかった、あれは世界に冠たるバブルだったよねという話が1回出てきて、あとはだいたいヨーロッパと似てるよと言って、おしまいになっている。それと、世界の金持ちランキングで日本人がトップだったことがあるという話で出てくるぐらい。

飯田 グラフの中に日本についてのデータもあたりするのですが、それについての言及が本文ではほとんどない。いちばん重要なのがフランスとイギリスで、次に米国、おまけでドイツ、イタリアで、そのまたおまけぐらいに日本が出てくる程度です。

山形 それと申し訳程度にその他の発展途上国ですね。しかし、日本の扱いはその他の発展途上国よりも薄い。中国などには皆興味があるので、発展途上国を見たいという気持ちはわかります。

飯田 今日はピケティの本に出てこない、日本の話も少ししようかと思うのですが、米国型またはヨーロッパ型と比べての日本の格差の特徴は、あるとしたら何なのでしょう。

山形 それはむしろ、飯田さんにこちらが聞きたいところです。教えてください。

飯田 ピケティの本に対する批判で、有力だと思うのが、資産の占める割合がものすごく大きいと言うけれども、その大半は住宅ではないかという指摘です。そうすると資本家とは、いわゆる大金持ちや実業家で事業資産や金融資産を持っている人というよりは、自己所有の家に住んでいる人ということになる。するとそこでの格差とは、自己所有の家に住んでいる人と賃貸

△
山形氏
← より
入った
山形正に
変えました

の家に住んでいる人の格差となって、ここで語られてきたストーリーから見えてくる風景とはだいぶ違って来る気がします。

山形 先ほども見た図3～5は、イギリス、フランスおよび米国の資本の構成を表したグラフです。図中の黒い部分は農地で、今は農地の価値はほとんどなくなっています。グラフの一番上の線だけになっているところは、純外国資産で、イギリス、フランスの植民地です。農地のすぐ上にある薄いグレーが住宅です。イギリスでもフランスでも70年代以降は、住宅だけが資本/所得比率を押し上げています。米国は、サブプライム危機ではじけた住宅バブルがあったので住宅の占める割合は絶対増えていると思っただら、あまり増えていない。

この本の記述からは、金持ちが金融資産をため込んでもうけているのだというニュアンスが何となく伝わってくるのですが、全体を見ると必ずしもそうはなっていない。もちろん、すごい金持ちは巨大な邸宅に住んでいる場合もあるけれども、それでもGDPの何倍にはさすがにならないので、これは一般の人の持ち家を反映していると見るのが、たぶん適正ではないかと思えます。

飯田 そこで日本の格差の特徴について考えたいと思います。データで見ると、上位10%の高資産家が全資産に占めるシェアが5割を切っている国は、世界でベルギーと日本しかない。実は日本は資産に関しては、少なくとも相対的な意味では世界でトップ争いをするくらい平等な国です。にもかかわらず、非常に強い格差感が日本社会にある。それはなぜなのかといったときに、米国の1%対99%とか、ヨーロッパの資産家対一般人ではなく、日本の場合、例えば持ち家層や中くらいの資産を持っている人と全然持っていない人との格差のほうが、強く意識されているからではないかと思えます。

山形 そうかもしれない。米国の格差の話をするときでも、ビル・ゲイツはすごい金持ちかも

しれないけれども、それでひがむことはない。普通の人たちが普通の生活を送ることができているのならいいではないかという話になる。この本に対する批判の1つは、まさにそれです。トップ0.1%を見ればそりゃあ大金持ちだろう。しかし、そこだけ見て資本主義の破壊だとか、民主主義がそれで滅びると言うのは言い過ぎではないか。格差は是正したほうがいいかもしれないけれども、最低限の生活が向上して、一般の人たちが普通に暮らしていければ、それは問題ではないのではないかという批判です。

ただ、日本の場合、中間層でも持ち家のある人となない人がいて、日々の生活の中でそういう格差が目に見えたものになってくるので、むしろそれがもっと強く感じられる可能性はありますよね。

飯田 例えば米国のトップ1%の所得シェアが20%ぐらいでしたか。ということは、そこから徴税したら結構大きいではないかと思ってしまう。「1%しかいないのだからそれほど重要ではないです」論は、日本だと成り立つかもしれないけれども、米国については成り立たないなという感じがします。

山形 そうですね。

8 格差解消の方策とは？

飯田 ピケティの議論をもう少し進めて、ではこの格差に対してどんな解決策があるのか。その解決策が、先ほどから何度か出ているグローバルな累進資本課税ですが、それはいったいどのようなものなのでしょうか。

山形 いま日本でも土地や家を持っていると固定資産税がかかります。その対象範囲を広げろという話です。固定資産税は、土地が小さいと少しまけてもらえます。ですから、少ししか持っていない人は税率が低く、かなり多く持っている人は税率が少し高くなります。同様の課税を不動産だけではなく、金融資産やほかの事業資

産などにも広げよう。土地も、株も、事業資産も持っている人はかなり高めの——高めといっても数パーセントですが——税金を毎年かけて、少ない人は低めの税率にして、あまり持っていない人には税金を全然かけないようにしよう、というものです。

ただ、それを一国でやっても、税率の低いほかの国にお金を移したりするだけなので、特にお金持ちのほうがそれはうまいので、世界で同時に、同じ税率でやろう。しかも、今だとタックスヘイブンとか、銀行のデータだと隠したり、不明なところが多いので、世界中の銀行同士でデータを共有して公開して、誰が何を持っているかを完全に捕捉できるようにして、その上で世界中同じ税率で資本課税しようよ、というのがこの本のアイデアです。

飯田 比較的納得しながら第Ⅲ部までを読んだ人が戸惑うのは、その壮大すぎる第Ⅳ部の解決策の部分だと思います。

山形 そうですね。本の帯に推薦人として名前が出ているビル・ゲイツも、この本は重要だと言いつつ、しかし、この解決策はないんじゃないと言っている。もちろん、自分自身への利益誘導という面もあるだろうけれども、それがうまくいく道筋は、今はちょっと考えにくいと、皆思ってしまうと思います。

飯田 この議論を聞くと、大昔に聞いたことがある一国革命論と世界革命論を思い出してしまいます。

山形 トロツキー様！

飯田 一国だけで社会主義を実現するのは不可能であるが、世界同時革命により、世界で共産主義をやれば共産主義社会は実現可能なのだという議論と、妙に結びつくところがあるなど思い、やはり21世紀の資本「論」的なイメージも持ってしまいます。

山形 世界中にピケテルンをつくり、これを推進しましょうと（笑）。

飯田 所得税に関する議論で面白かったのは、

所得税ができたから所得を捕捉できるようになったという話です。実は、近代国家の成立期から日本は所得税を取り始めた珍しい国です。手本としたドイツに所得税制があった国だったので、日本は世界でもかなり早い段階で所得税が導入されたのですが、米国は導入がかなり遅れた。そのときの最高税率が確か所得の数%という低さで、非常にうらやましい税率です。

山形 それでも当時の人はこれでは資本主義の崩壊だともすごい抗議をしたという。この本はこういうトリビアもいろいろ面白い。

飯田 税金を取れるとなると、税務署が血まなこになって捕捉してくれる。資本課税を米国が始めたら、米国の税務当局が血まなこになって世界の財産を捕捉しようとするでしょうから、それは結構実現できてしまうのかとも思う。

山形 この中に1つ出ているのは、資本課税はタックスヘイブンのデータを公開しないと無理だと言っているけれども、米国がスイスに圧力をかけたら、スイスはだんだん公開し始めたじゃないか。カリブ海のケイマン諸島や英領バージン諸島でも少しずつ始まっている。やる気があればできるんじゃないのという。

ピケティも、グローバル累進資本課税がいいのだと言ったその次の文章で、僕もこれは空想だとわかっているけれども、まずベースラインとして検討しましょうよと述べ、その後だんだん、これもできているし、あれもここではできているし、これをもう少し延ばすとできるかもしれないよと、最初に期待を落としてからだんだん上げていく構図で話を進めているので、上手だなと思います。

飯田 僕も読んでいて、何となく、できなくもないのではと思ってしまう。

その一方で、格差是正のためには、ほかの手法もずいぶんありますよね。それらへの採点がやたらピケティは辛いと思います。例えば、特にヨーロッパ型の格差の場合は相続が問題だと言う。だったら相続税で対処すべきでは、と思

ってしまいます。そういった部分については、
 どういった議論がされているのでしょうか。

山形 相続は、捕捉がいまいちだというのと、
 もう1つは、1世代に1回しか起きない。間が
 ずいぶんあいてしまうので、状況がよくわから
 ない。ピケティの言い方だと、資本課税をやり
 たい理由は、別に税収が欲しいのではなく、先
 ほど飯田さんがおっしゃったように、情報が欲
 しいのだ。誰が何を持っているかをきちんと捕
 捉できるようにしたいのだ。それには相続税で
 は足りないのですという話をします。

しかし、格差解消という点からすると、相続
 税をもう少し使ってもいいのではないかと思
 います。相続税が、情報の捕捉以外の点で全く効
 かないとかいう話はほとんどされていなくて、
 では、それも使えばいいじゃないかと思いま
 すよね。戦後の格差がなくなった時代だって、1
 つのことですべてが解決したわけではなく、イン
 フレあり、課税あり、いろいろありで解決し
 たので、本当はいろいろな組み合わせをもっと
 考えて、ほかの解決策をあまりディスらないで
 ほしいなとは思っています。

飯田 累進所得税もそうですね。ニューデ
 ール政策以降、累進所得税のおかげで所得が平
 等化したと言っているのだから、累進所得税も
 使えばいい。

山形 所得税率をもとに戻す話あまり前面に
 出てこないのはちょっと不思議なところではあ
 ります。

飯田 米国だと、特に1980年代半ば以降、税金、
 特に富裕層の税金を上げるという選択肢がほと
 んど出てこなかった。仮にこのピケティの本の
 影響がもっと大きくなり、例えば資産課税、ま
 たは相続課税、所得課税をやり始めたら、世界
 の流れが変わると思います。

山形 そうですね。よくクルーグマンが自分
 のコラムで揶揄していますが、米国は90年代以
 降、不景気だから減税、景気よくなったらご
 褒美だと減税、戦争するからといって増税する

かと思ったら、これもまた何かよくわからない
 けど減税。しかもそれをやるためにいろいろご
 まかし、標準的な人にとっては減税になります
 と言いつつ、実は富裕層だけ減税になり、低所
 得者層には増税になるような政策をとっている、
 と繰り返し指摘しています。それがそろそろ限
 界に近づいているので、増税について真面目に
 考えなければいけなくなってくると思います。

飯田 日本もそういうところがあるかと思いま
 す。景気対策のために富裕層の税負担を軽くし、
 財政が危機的なので低所得者層の負担を増やす。
 増税も減税も、1つ1つの政策を見ると、官僚
 は作文がうまいので納得してしまいそうですが、
 2つ並べると、これは何なのだと思うことは結
 構あります。

9 その他の手段は？

飯田 さらにもう1つ、資本からの収益のほう
 が高いことが格差を生んでいるとしたら、生産
 手段の公有化という、古く懐かしい議論にはな
 ってしまうのですが、例えば資本の一部を公的
 に所有するという議論になりそうですが、そっ
 ちにもあまり行かないという点も不思議ですね。

山形 そうですね。この本では、公共が持つ
 ている資本が、最近になって民営化がどんどん
 進んだりして減ってきました。これが格差とい
 うか、民間の資本がやたらに膨れ上がっている
 理由の1つですという分析が行われるのですが、
 だったらそれを逆転すれば、完全には解決しな
 くとも、少しよくなるのではないかと思うけれ
 ども、そういう議論は出さないですね。

飯田 社会主義、共産主義としっかり距離をと
 ろうとするのがピケティの新しさですね。資
 本主義を認めた上で、自由主義的な経済を放っ
 ておくとろくなことにならないから、調整しな
 がらうまく回していく。そういったビジョンを
 見ていると、「21世紀の資本論」というよりも、
 扱っているテーマは全然違うけれども、すごく

『一般理論』っぽいものだなと思う。

山形 ちなみに、ケインズも、貨幣改革論——僕の訳だと「お金の改革論」ですが——で資本課税のようなものを考えてもいいのではないかという話をしているので、意外とそういう伝統にもつながっているのかもしれない。

飯田 公的な資産と同時に、公的な債務——日本で言うところの国債の残高——についても所々で触れられていると思うのですが、かつて分配に興味があった経済学者は、公的債務が膨れることを恐れていたという視点は面白かった。

山形 公的債務の話で最後に章が設けられているのですが、話がすぐEUの問題に飛んでしまう。昔はインフレ政策をとったりして解決できたけれども、EUはあちこちでたまっている公的債務をどう処理するかという話になり、それまでの世界的な視点から、第IV部になるとヨーロッパセントリックな議論がずっと続くので、公的債務をどうしたいのかはいまいちよくわからなかった。

飯田 例えば、19世紀の分配に関する理論だと、公的債務を富裕層が債券という資産として持っている、つまり国債を持っているのは資産家だ。貧乏人から税金を取って金持ちに金利をつけて返しているのだから、それはとんでもない格差拡大要因だという議論をされるが多かった。面白いのは、債券が主な資産だったら、インフレが最も簡単な所得再分配政策だということです。しかし、現代では国債が主要な資産ではないので、とか、そこら辺が二転三転して、第IV部でどちらに行きたいのかちょっと見えなくなるんですよ。

中心の部分から離れずについていかないと、結構面白いトリビアとか、ちょっとした文学ネタなどがたくさん散りばめられていて、時々本筋が見えなくなってしまうのが本書の注意点です。

山形 もう1つの注意点としては、何度か言っているけれども、実際データを見たらこうなっ

ていましたというのがこの本の強みで、その理由の分析は必ずしも強くはない。たぶん、本人は結論を持っていて、論文では書いたりしているけれども、この本の中では、例えば r は g よりなぜ大きいのかとか、 r はなぜ4%ぐらいなのかということに関しては、心理的な面もあるし、あれもあるけれども、複合的だよと言って、それでおしまい。

また、経済成長が1.5%ぐらいでこの先進国ではないかという議論にしても、これまでがそうだったからと。累進資本課税なり何なりして税金を集めたら、それで何かして g を上げようと普通考えると思うけれども、そういう議論も一切ない。 r と g が完全に切り離されているところは、この本の強みでもあり弱みでもあります。

実際そうになっているんだもと言われると、皆黙るしかないけれども、対策を考えるに当たっては、もう少し、なぜそうなのかにまで踏み込まなければいけない。ただ、それは、ピケティ自身も別のところでやっているし、この本を読んだ経済学者たちにやるべきテーマをつくってくれたという意味では、非常に感謝すべきだと思います。

飯田 これだけの大掛かりな作業なので、ピケティの所属しているパリ経済大学自体が一大プロジェクトとしてこの問題に取り組み始めると、もっといろいろなことが明らかになってくるのではないかと思います。

山形 ちなみに、彼はこの本のベースになっているデータベースをつくり、ウェブで公開しています (<http://topincomes.parisschoolofeconomics.eu>)。ほかの経済学者も使えるデータベースをつくってくれたのは、格差論の研究を進めるに当たり、非常に重要だと思います。

飯田 米国で主流派と呼ばれている経済学者たちが理論的な反論を一生懸命試みるけれども、それは僕としてはすごく違和感があります。理論はかなりふわふわしているので、そこを攻撃

r, g
イア

これを正
△しました

してもしょうがない。本丸のデータについては
 まだまだ検証しきれていないのかと思います。

山形 ピケティは15年かけて集めたデータソースに基づいて議論しているわけです。それに対して1年や半年でデータを集めて反論するのは、なかなか難しいですよ。

日本のデータがどこから集められているかは、はっきりとはわかりませんが、先ほど申し上げたピケティのHPの世界高額所得データベース(The World Top Incomes Database)というところに行くと、ちゃんと日本のデータはあるし、また、その参考文献の中にも、ピケティが日本の研究者と行った日本の分析も出ているので、そこにある程度整理されて公開されているはずですよ。

この本で1つ面白いのは、所得の高い人の分析をするときに、データがないからといって『フォース』の金持ちランキングを使っているところですよ。あれは、通常は単にこんな金持ちいるやとゴシップ的に見るものですが、彼はそれを真面目に分析して、きちんと結論を引き出している。あれは立派ですよ。日本では、例えば高額納税者ランキングは興味本位で使われてよくないと言われて、発表されなくなりましたよね。データはあるのだろうけれども、公開が止まってしまっている面も若干あるのかなという気はしています。

ですから、今後は高額所得者の番付を復活したり、いろいろな形で情報公開をしたりして、それをもっとわかりやすい形で皆に広めるような努力は日本でも必要だと思います。

飯田 統計のデータについては、日本国内だと、指定統計の目的外使用の申請をすれば一応利用できることになっていますが、その省庁とそんなにつながりがない人が目的外申請をすると、微に入り細に入りちくちくやられて途中で面倒くさくなってしまいます。ルール上は公開されているけれども、実際使おうとすると変にハードルが高いのが日本の特徴です。

山形 あともう1つ、資産価格のデータなどは日本は弱いところで、特に土地や不動産のデータがそろっていない。路線価や簿価はあるけれども、それが取引価格に基づいてアップデートされているような米国みたいな体制や、それを誰でも見られる体制はない。日本のデータの集め方に弱いところもまだあるので、こういうのは重要だという認識が高まれば、そういった点もたぶん整備されてくるのではないかと期待したいところです。

10 どろくさい研究に光を

飯田 最後に、月並みですが、この『21世紀の資本』を、どんな人に読んでほしいですか。

山形 どんな人に読んでいただいても構いません。難しいとか、分厚くてとっつきにくいとか言われるけれども、読んでみると言っていることは非常に明快で、そんなに難しくはない。

トリビアがあちこちに含まれているという話を先ほどもしたけれども、面白かったのは、昔フランスでは、独身税と、それから結婚して3年経っても子どもができない税というのがあったという話です。最高税率を各国で比較するときに、そこを含めるべきかどうかという話が出てくるのですが、最近の日本でも、人口を増やすためにそういう税を導入したらと提案する人がいて、世の中考えることは同じだな、と(笑)。

つまみ食いするなり、通して読むなり、とにかく気が向いたら気が向いたところを手にとって読んでいただきたい。ただ、それをもとに何か言うときには、その前後を読んで文脈は押さえていただきたい。そのぐらいですかね。

飯田 これは経済学の業界話になってしまいましたが、いわゆる主流派の経済学自体が、だんだん現実の重要な問題に対してもがいてチャレンジをしていく学問ではなく、型の美しさを競う品評会になっているのではないかとこの点ですね。経済には興味はないけど経済モデルは好き

「というか」トリました

△ ~~そう~~いうすごいところに来てしまっている側面がある。経済学は洗練されたスノビッシュな技では行けないと思う。荒削りであっても、もう一回、社会の問題と直接格闘することで、いろいろな活動やものを考える道具にならなければいけない。まあだいたい満身創痍で傷ついて終わることになるのだとは思いますが。

本書は、直接的な解決策は提示していないものの、問題を明らかにし、それを何とかしたいという思いが感じられる経済学の本は久々です。
山形 1971年に彼の先人に当たるクズネッツがノーベル経済学賞をもらったときに、ノルウェー・ノーベル委員会の1つの腹づもりとしては、こういう経済統計をあさって積み重ねていくような地道な活動をもっと人気が出るものにしようと考えていたと言われています。ただ、俺の知的能力を見よと言えるようなファッショナブルな分野ではなく、10年間ほこりの積もった書類と格闘していたという世界になってしまうの

で、いまいちうまくいかなかった。その後、グリリカスやジョルゲンソンなどが一生懸命、生産性の計算などをやったが、いまいち流行しなかった。

ただ、今回、こういう研究に日の目が当たったことで、その認識が少し変わるのではないかと。多少泥臭いことをやっても、ちゃんと現実につながる話をすれば、注目を集める可能性がないわけではないのを示してくれるのは、非常にありがたいし、これが次の動きをつくってくれればと期待しています。

本当に、本書がもとになって皆の関心が変わるかどうかは、今後の動向を見るしかないし、これをお読みになられた、あるいはこれからお読みになる皆さんの活動次第ですので、ひとつよろしく願います(笑)。

飯田 ありがとうございます。

[2015年1月10日収録]